



E-mail : office@hrcg.jp
電話 : 080-5830-2016

特定非営利活動法人 北海道総合地質学研究センター
Hokkaido Research Center of Geology

HRCG 通信

第7号

2022年5月30日

特別講演会を開催しました

嵯峨山 積

去る5月15日（日曜日）の2022年度通常総会の前に特別講演会を開催しました。講演名は「石狩低地帯の縄文時代：珪藻・花粉・考古のはなし」、講演趣旨は「12,000年から2,500年前の縄文時代はどのような時代だったのでしょうか。今回、石狩低地帯について微化石から当時の自然条件を復元し、その中での人々の暮らしを想像することにしました。」です。講演時間は開始13:20、終了15:05の1時間45分で、参加者は会場24名（会員15名、非会員9名）、オンライン2名でした。

演題は以下の3件です。1) 花粉化石からみた縄文時代の始まりからの環境変遷の解析について（星野フサ会員）、2) 縄文海進と石狩低地帯の形成：珪藻化石からのアプローチ（嵯峨山 積会員）、3) ヒトの環境適応の視点から見た石狩低地帯（工藤義衛；いしかり砂丘の風資料館）。

2021年の縄文遺跡群のユネスコ文化遺産登録もあり、石狩低地帯の縄文時代を取り上げた講演は興味深く聞いていただけたのではないのでしょうか。

新型コロナ対策のため、少々広めの部屋を用意したつもりでしたが、当日は多数の出席者に恵まれ、やや狭いと感じられたかもしれません。今後ともタイムリーな話題を提供し、会員や市民の知的好奇心を更に育てていくことができると考えています。写真は講演会の様子です。



オマーンの自然と文化

宮下 純夫

アラビア半島のオマーンは面積が日本よりもやや小さく人口は500万に満たない国である。アラビア半島という砂漠が代名詞で、オマーンも内陸部には広大な砂漠が広がっているが、3000メートル級の山々が連なるハジャール山脈が北東海岸に沿って弧を描くように走っている（写真1）。最近、オマーンに関する学際書（松尾昌樹編著、オマーンを知るための55章、明石書店）が出版され、その自然や文化、歴史を詳しく紹介している。

1995年以来、地質調査のために25年間にわたってオマーンへ通い続けることとなった。2020年2月のコロナパンデミックの直前にオマーンで開催された国際会議に参加したが、その滞在中にスルタン・カブース国王の逝去に遭遇した。同国王は鎖国状態にあったオマーンを、学校の開設に始まり、近代的な国家へと作り変えるなどしてきた。

オマーンでの調査は奥地へ行くほどある種の困難がつきまとう。たとえば、イスラム教には遠方より来る旅人はもてなせといった戒律があるようで、奥地の小さな集落に入っていくと人々がワッと集まり、ご飯を食べて行け果ては泊まって行けと激しく攻められるのである。毎回付き合っている調査にならないので断ることも多かったが、何回か強制連行されて大ご馳走を振舞われたことがあった（写真2）。また一度奥地を調査している学生が、通りがかりのおばさんから袋いっぱいの果物や野菜をもらって帰ってきたのには驚いた。

オマーンをニュースで聞くことは殆どないのは国内がいかに平穏であるかの証明でもある。東京大学にはオマーン特別講座が設置されるなど日本との交流も盛んである。今年は両国の国交50周年ということで、記念行事が予定されている。人口密度が希薄なぶん自然は豊かである。それを満喫したい欧米からの観光客でいつも溢れており、ヒッチハイク中のウクライナからの旅行者を運んだことも思い出深い。なお、NHKのBSプレミアムのグレートネイチャーでもオマーンの自然や地質が紹介されているので、オンデマンドでご覧いただける。



写真1 オマーンの風景。手前の建造物は古代の墳墓で世界遺産になっている。背後の山は落差千メートル以上の絶壁で岩登りの名所となっている。



写真2 オマーン人の家に「拉致」され一族郎党が集まってきてご馳走を振舞われた。帽子を交換している。

5月15日に開催された本センターの総会において理事長に選出されました。当日に開催された特別講演会「石狩低地帯の縄文時代：珪藻・花粉・考古のはなし」は会員外も含めて26名もの参加があり大成功でした。

さて、コロナパンデミックは3年目に入った現在もまだ先が見通せない状況が続いていますが、このパンデミックが収束し従来の様々な社会的活動が全面的に復活する日を待ち望んでいます。一方、2月24日に開始されたロシアによるウクライナ侵攻は、気候変動やCO2排出削減にも重大な悪影響をもたらしています。気候変動による弊害は、熱波の到来や大規模洪水の頻発など、さらに深刻化しつつあります。日本列島では地震や火山噴火も重大な関心事です。本センターは退職した研究者や技術者への居場所の提供に加えて、上記のような問題への社会的発信や啓発・普及活動に取り組んできましたが、今後ともさらにそうした諸々の活動を展開・発展させていきたいと念願しています。会員の皆様の積極的な関与を期待しています。

理事長退任あいさつ

前田 仁一郎

5/15の総会で理事長を退任し、設立以前の準備期間約1年を含めると7年間におよぶHRCG最優先の生活に終止符を打つことになりました。この間、皆様のご協力でexcitingな日々を過ごすことができたことに感謝いたします。特に設立以前の準備期間から今日まで、ともに行動してくださった嵯峨山積さんには心から感謝いたします。僕がHRCG 設立「運動」を始めた7年前、嵯峨山さんが一緒にやろうと言ってくださらなかったら今日の HRCG は絶対に存在しなかったでしょう。法人の設立など全くの未経験で、試行錯誤を繰り返しながら、様々な手続きのため2人で道庁、市役所や法務局、税務署、あるいは教育委員会などなどを廻ったこと、また設立後には「営業」のためにコンサルタント会社を廻ったり、地質調査業協会の理事会に「乗り込んだり」したことを懐かしく思い出します。

さて、HRCG は version 1 から version 2 に移行することになりました。僕もversion-up の行方を楽しみにしております。僕は今年で 72歳になりますが、まだまだやりたいことが沢山あります。僕も退職後人生の v1 から v2 に移行し、新たに exciting な日々挑戦するつもりです。2つの v2 に Good luck !! 再度感謝。

第4回HRCG論文輪読会講師のお願い

論文輪読会を本年度も7月中頃に開催したく、ただ今講師を募っています。応募してくださる方は、6月中頃まで下記担当までご連絡ください。

HRCG論文輪読会担当：高波鐵夫 (takanami@hrcg.jp)

本通信は以下のURLにも掲載されています
<https://www.hrcg.jp/archive.html#tushin>



会員紹介・会員短信

活動記録

3月13日 (日) 第6回会員交流会 (オンライン)

4月 8日 (金) 幹事会 (オンライン)

5月 9日 (月) 幹事会 (オンライン)

5月15日 (日) 特別講演「石狩低地帯の縄文時代：珪藻・花粉・考古のはなし」

5月15日 (日) 2022年通常総会 (ハイブリッド)



理事
関根 達夫

4万1千年前の支笏火山噴火による火砕流が豊平川を堰き止め「古藤野湖」を形成したと考えています。他水系の湖沼堆積物を求めて、古壮瞥湖、古俱知安湖の研究を進めています。2018年胆振東部地震の崩壊地調査を整理するためにQGISを勉強し、今年はQGISで町内会の地図を描いています。近年、多視点から撮影した写真を数百枚取り込むと、自動的に3Dモデルを作成するアプリを入手し、地質露頭の3D化に取り組んでいます。



理事
高波 鐵夫

連休最後の5月5日、バスを乗り継いで浦河町立郷土博物館に行ってきました。そこには米国のワシントン・カーネギー研究所から寄贈された高感度広帯域地震計が展示されています。これは北海道やその周辺海域で頻発している地震を精密に観測する目的で、旧浦河町立上杵臼小学校裏にある北大浦河地震観測所に設置されていましたが、観測所の無人化に伴って、最近この博物館に移設されました。私も関係者の一人として、時々その展示のお手伝いをしています。



HRCG通信第7号の最大のニュースは何といっても理事長交代でしょう。本号に掲載された前理事長の前田さんの退任挨拶と新理事長の宮下さんの就任挨拶からはお二人の人格が偲ばれます。まずは、この場を借りて本会の維持・発展のために長年力を尽された前田さんには敬意と感謝を表します。一方、宮下新理事長は、時々HRCGの集まりでオマーンの地質を分かりやすく紹介されてきました。本号にも関連記事を寄稿くださり、オマーンに対する熱い思い入れが伝わってきます。また、2022年度通常総会前に開催された「石狩低地帯の縄文時代」特別講演にはタイムリーな講演の紹介が嵯峨山副理事長から寄稿されました。(高波)